

02・昼休みの円形教室で、自分からぱんつ脱いでささやきクリいじりでイかせてもらう
トラック01からそのまま続き。

※ トラック01から自然に続いて闻ける印象にするため、 トラック間の時間は通常より短くする。

とある年の春。

五月十二日。十二時半ごろ。

場所は主人公とシーラが通っている学園の、とある講義室の入り口。

天気は晴れ。気温は二十二度程度。

主人公とシーラ、あまねと日菜子と一旦別れ、講義室に入る所である。

SE1　昼休みの廊下の喧騒

【最初から最後まで流す】

【トラック01のSE4と同じ音。開始位置を変えて流す】
【非常に音量を小さくして流す。ほとんど聞こえない程度】

【0—2秒ほど流してSE2】

【その後、SE4で扉が閉まるとともにフェードアウトして完全に聞こえなくなる】

SE2 シーラが講義室の扉を開ける音

【最初から最後まで流す】

シーラ、講義室の扉を開ける。

まずは主人公が講義室に入り、シーラが続く形になる。

SE3 主人公の足音

【最初から最後まで流す】

【繰り返して流す】

【0—2秒ほど流してSE4】

【▲1 で一度ストップする】

【▲2 で再開する】

【▲2 から7秒ほど流してストップする】

【▲2 から、『広い講義室』を表現するために、少しエコーがかかる】

S E 4 シーラの足音

【最初から最後まで流す】

【繰り返して流す】

【0～2秒ほど流してS E 5】

【▲1 で一度ストップする】

【▲2 で再開する】

【▲2 から7秒ほど流してストップする】

【▲2 から、『広い講義室』を表現するために、少しエコーがかかる】

▲1 ここで一度S E 3とS E 4がストップする。

S E 5 シーラが講義室の扉を閉める音

【最初から最後まで流す】

主人公とシーラ、無人の講義室に入つて行く。
目指すは、いつも座っているお気に入りの席だ。

講義室はとても広い。

大学によくある円形教室のイメージ。
椅子は独立しているタイプ。

▲2 ここでSE3とSE4が再開する。7秒分ほど流してストップする。

主人公、シーラに椅子を引いてもらう形で着席する。

SE5 シーラが椅子を引く音

【最初から最後まで流す】

SE6 主人公とシーラが椅子に座る音

【最初から最後まで流す】

主人公、席につくと、『ふう』と少々わざとらしいため息をつく。
わざとらしいというか、わざとなので仕方がない。

二人きりになつた事で、否応なしにシーラの事を意識してしまったのだ。
だが、これはおそらく自分だけなのだろう。
そう思うと、なんだか癪にさわる。

だから……主人公は素直に『キスして』とお願いできず、物欲しげにシーラを見上げてみては、あからさまに目をそらし。

かと思えばまたちらちらと、期待を隠しきれないそぶりをしてしまう。

シーラは教室の座席配置と同様、主人公の左隣に座っている。

〈主人公〉

「……ふう。やーっとお昼だね」

主人公、どぎまぎしながら、ごく自然な態度を装つて話しかける。

露骨に不自然だ。

●左 30センチ

「穩やかに優しく。

疲れ気味の主人公をいたわる。

主人公の様子がなんだかおかしく、発情しているようなには気づいている。
だが、完全に知らないふりをしている
ふふ。お疲れですね。

お二人が戻るまで、少しお眠りになられますか？』

『主人公』

「……ううん、大丈夫。さつきすごい寝たし。

シーラの美味しいダイエット弁当をいただからないとねー……』

主人公、そうは言いつつも、まるで落ち着きがない。

そわそわと己の膝をきすつては、お弁当があるとは思えない位置と方向に身体を向けて
いる。

シーラはそれを、穏やかに見つめている。

●左 30センチ

『小さく微笑んで。

主人公の一挙一動が可愛らしいので。

また『お弁当を食べる』と言いながら、主人公がどこかそわそわした様子なので。

その理由は、すでにおおむね察している

然様（さよう）でございますか？

では、お食事のご準備を

△主人公

「あー、ちょ。ちょっと、と待つて」

●左 30センチ

「※息づかいのみ※ で表現する。

少し不思議そうに。

主人公の態度が妙なので

……？

〔小さく微笑んで。〕

不思議がりつつも承知する。

『お弁当もまだよいのですか？』という意味で言っている。
主人公の意図は、すでにおおむね理解している。

だが、その点に関してはまだつつこまない
それもよろしいのですか？』

△主人公

「うん。やつぱり。

やつぱり二人が来てから、もらおうかな！」

主人公、これでは何がしたいのかまるでわからない。

もちろん、シーラのお弁当は食べたいと思っている。

お腹はすいているし、シーラはああは言つても、うまい事工夫して主人公の好物を詰めてくれているはずだ。

だから素直に先ほどの手提げに手を伸ばして、お弁当箱を取り出して食べればいい。だけど……。

〈主人公〉

「それより……。さつきからさあ。

授業中からさあ。

シーラ、なんつかニヤニヤしてない？」

それができずに、主人公は脈絡もなくシーラにいやもんをつけ始める。

授業中から、シーラが妙に含みのある態度を取つてゐる事について、絡み始める。

主人公、シーラと会話するために、顔をシーラの方へ向ける。

お互いの顔が向き合った事で、声の方向が『左』から『正面』に変わる。

●正面 30センチ

「にこやかに優しく。

全く動じていない。

『そんなまさか』と、しらばつくれる感じで】

え？

【少し間が空く。

にこやかに優しく。

『全く心当たりがない』としらばつくれる感じで】

いえ。とんでもない。決してそのような事は】

〈主人公〉

「いや、笑ってるね」

だが、これはあながち外れではなかつたらしい。

言いながらシーラの顔は少しずつ緩んでいき、次第に笑いをこらえられなくなってきた様子だ。

シーラは普段ポーカーフェイスのクール系穩やかメイドで通っているが、実際はそうでもない。

感情を抑えるのがうまいだけで、喜怒哀楽は普通にあるのだ。

今だつて……内心主人公の事が愉快でしようがないに決まつている。

●正面 30センチ

「にこやかに優しく。

少しずつ声に笑みが混じり始める。

引き続き『そんなまさか』と、しらばっくれている】

そんな。笑つてなんて……』

〈主人公〉

「笑つてるでしょお！」

●正面 30センチ

「穏やかに小さく笑い始める。

あくまで小さく、上品に笑つている感じで。

しかしこれは、シーラとしては『大爆笑』の部類に入る】

ふふつ。ふふふふつ……」

こうして、シーラは破顔した。

肩を小さく震わせて笑い始め、とうとうこのような事を言い出す。

●正面 30センチ

「『※マーク』まで、笑いをこらえつつも、こらえきれない感じで。穏やかに小さく笑いながら話す。

しかし、あくまで小さく、上品に笑っている感じで。

先ほどの授業での主人公の事を思い出して『思い出し笑い』している……だつて、お嬢様つたら……。

授業中、あれ程ぐつすりお休みになっていたのに。急に起き上がられたかと思つたら。

〔特に笑いをこらえきれない感じで。〕

思い出せば思い出すほど面白いので】

……あんな事をおっしゃるんですもの……」※

〈主人公〉

「……もう！ やっぱり笑つてた！
ムカつくやつだなあ！」

だが、主人公はまんざらでもない。

つまるところ、シーラが己に関心を示してくれるのなら、何でも嬉しいのだ。
それは間違いなく、シーラにも伝わっているだろう。

シーラは主人公の事など、すべてお見通しで。

だからこそ、こんな生意気な態度を取るのだ。

●正面 30センチ

「穏やかに小さく笑いながら話す。

あくまで小さく、上品に笑つて いる感じで。

しかしこれは、シーラとしては『大爆笑』の部類に入る】

ふふ。ふふふふつ♥

ええ、申し訳ありません……。

笑つてしましました。

お嬢様が、あまりにも可愛らしいのですから、つい……」

（主人公）

「ふーん。そお。可愛いとは思つてるんだ？」

そのうえ、この訊き方がもうダメだ。

これでは『可愛い』と言わせようとしているのがバレバレではないか。

●正面 30センチ

〔穏やかに小さく笑いつつ、次第に通常の話し方に戻る〕

ええ。

……そうです。

〔通常の話し方に戻る〕

お嬢様が魅力的だから。
つい、授業中も」

だが、シーラはしつつとこれにのり、こんな事を言う。

それから、また主人公の左耳元に唇を寄せ、先ほどと同じようにささやいてきた。

これによつて、声の方向が『正面』から『左』に変わる。

★左 ささやき 0センチ ※マークのセリフまでささやく

「ひそひそと、そつと、優しく。

だけど少しセクシーな感じで。

主人公と聞き手に、今後のえつちな展開を期待させるような感じで。

トラック01での行動を再現するような感じで」

このように、ちよつかいをかけてしまったのです」※

△主人公△

「……あつ
♥」

それは、単に耳元でひそひそ話されただけだ。

だが、主人公はそれだけでびくんと、敏感すぎるほどにあからさまに反応する。

そうだ。

わかってはいるのだ。

なのに、わかっていて主人公はこうなる。

シーラはこんな風に身もだえする主人公を見るのがとにかく好きで。

こんな、いかにもしとやかで従順なメイドのふりをしておきながら。

隙あらば、こうして悪戯してくるのだ。

シーラ、引き続きさやく。

★左ささやき〇センチ※マークのセリフまでささやく
「ひそひそと、そつと、優しく。
だけど少しセクシーな感じで。

主人公と聞き手に、今後のえっちな展開を期待させるような感じで。
トラック01での行動を再現するような感じで】

ふふ。

お嬢様。

ここは学校ですから。そのような声を出してはなりませんよ』

△主人公△

「……だつて……シーラが……つ♥ー

シーラ、今度は囁かずに、耳元で話す。

●左 0 センチ

「しつとりと優しく。

『私が何かしましたでしようか』という感じでしらばつくれる。
優しく微笑みながら、主人公の反応を楽しんでいる

うん？

どうか致しましたか？」

△主人公

「変な事するからあつ……」

こうなれば、もうシーラのペースだ。

主人公は媚びた甘つたるい声で反論するが、時すでに遅い。
後は、シーラに好きにされるのを待つのみとなる。

●左 0 センチ

「そつと、優しく。

指摘を受けても、まるで気には留めない様子で。
それが当然のように続ける】

然様（さよう）でございましたか。

そうですね。先ほどから、私（わたくし）がこうして

〈主人公〉

「……！」

言うと、シーラはさらに近づく。

そして、いよいよ主人公に本格的に触れてきた。

SE7 シーラが主人公の身体に触る音

【最初から最後まで流す】

シーラの手が、スカート越しに主人公の太ももを撫でてくる。

●左 0 センチ

「そつと、優しく。

今の行動を言葉で補足する】

触れたり……」

〈主人公〉

「……あ……！」

●左 0 センチ

「【※ごく軽く耳を吹く※

ふいうちで、ドキッとさせるイメージで】

ふつ。

【そつと、優しく。

今の行動を言葉で補足する】

驚かせたり】

〈主人公〉

「……ああつ……♥」

こうなれば、もう終わりだ。

主人公はなすすべもなく高く喘ぐと、必死になつて両手で己の口をふさぐ。幸いにもこの声は外に漏れておらず、誰かが近づいてくる気配もない。

だが、ここは昼休みの学校だ。

いつ、どのようなタイミングで、誰が訪れてもおかしくない。そもそも、もう少しだれば、あまねと日菜子が戻ってくるのだ。それなのに……シーラは、平気でこんな事をしていく。

●左 0センチ

「【※1回※ 耳にキスする。

耳の入り口に、軽く触れるだけのキス】

ちゅ。

【そっと、優しく。

今の行動を言葉で補足する】

口づけたり。

【※軽く、長めに耳を吹く※

とつくりに感じ始めて、スイッチが入っている主人公に、ダメ押しをするイメージでふー……つ。

【※1回※ 耳にキスする。

耳の入り口に、軽く触れるだけのキス】

ちゅ。

【少し間をあけて油断させてから。

※1回※ 耳を舐める。

ふいうちで、耳の入り口を、軽く舐める】
れろおつ……♥』

△主人公

「んんうつ……♥』

●左 0センチ

「そっと、優しく。

【今の行動を言葉で補足する】

舐めたりしてしまっては……。

そのようなお声が出てしまうのも、仕方ないのかもしだせんね】

△主人公

「はあ……♥ はあ……♥ はあ……つ♥

シーラのばかあつ……】

だが、紅潮した頬と期待に潤んだ目でこんな事を言つたところで、なんの意味もないだろう。

シーラは優しく、だが満足げに目を細め、すでに呼吸の荒い主人公を見下ろしている。当たり前すぎて時折忘れそうになるが、シーラは背が高い。

主人公とはずいぶんな身長差がある。

一見細身だから気づかれにくいが力だつて強いし、制服の下はしなやかで筋肉質だ。その気になれば、いつでも主人公を好きにできるのだ。

左 〇 センチ

「穏やかに優しく。

『ばか』と言われても、まるで気に留めない様子で】

あら。お嫌でしたでしょうか。

では、もう仕舞いに致しましよう。

あまね様と日菜子様が、いつお戻りになるか、わかりませんものね】

シーラ、言いながら、主人公の瞼にキスする。

主人公はそれを、またびくっと震えながら受け入れる。

●正面 0センチ 少しだけ上

「【※1回※】まぶたにキスする。

一見『これでおしまい』と言っているようなキス。

しかし実際は、主人公をもつとその気にさせるためにキスしている
ちゅ」

シーラ、主人公から少し離れる。

〈主人公〉

「……つ……
♥」

それでもシーラは、腕力にものを言わせたり、一方的に物事を進めたりしない。

あくまで決定権は主人公にあると言わんばかりに、突然引いたり、そのくせ名残惜しそうにキスしてきたりする。

このような事をされでは、主人公はもうダメだ。

もう我慢できなかつた。

主人公はシーラを恨めしげに見上げると、観念して自分から顔を寄せる。

一刻も早くシーラとキスをして。その口の熱さや柔らかさを確かめたくなつていたのだ。

●正面 30センチ

「穏やかに優しく。

恨めしそうに見上げてくる主人公を、優しく見つめているイメージで
ん？」

S E 8 主人公がシーラに近づく音

【最初から最後まで流す】

主人公、シーラの制服の胸元を握つて引き寄せ、自分からキスをする。

●正面 0センチ

「ほんの少しだけ驚いて。

主人公がしひれを切らして自分から顔を近づけ、キスしてきたので

……あ……。

【※7回※ キスする。

受け身な甘いキス。主人公の好きにさせているので
ん……つ。

ちゅ。ちゅ。ちゅつ……。
ちゅ……ちゅ。ちゅつ

【ここから、自分も攻める。

舌を入れてディープキスに移行する
ああんむ……。

【※5回※ キスする。

軽く音を立てるディープキス。
自分から積極的にキスする】

ちゅ。

ちゅつ。ちゅつ。ちゅぱつ……。

んつ……

【※息づかいのみ※ で表現する。

満足げな吐息】

ふう……

【嬉しそうに微笑む。

主人公の顔を覗き込んで言っているイメージ】

ふふ。

【そっと優しく。

だけど少しセクシーな感じで。

主人公と聞き手に、今後のえつちな展開を期待させるような感じで
お嬢様つたら。

お口では『嫌』と仰りながら。

本当はこれをしたかったのですね?』

〈主人公〉

「……つ
♥」

●正面 0センチ

「そつと優しく。

答えは『イエス』だとわかつていて、わざとたずねる】

……もしかして、授業中から?』

〈主人公〉

「だめえ……?』

主人公、さつきまで張っていた意地などどこかに忘れ、いかにも甘えた声を漏らす。

人前では『学生兼経営者』だの『お家の立て直しに奔走するお嬢様』だのとして振る舞つて いるが、本質はこっちなのだ。

幼馴染のメイドの事が心底好きで振り回されて。

いつも、あらゆる意味で負けて いる。

彼女とのセックスがとにかく好きで、すぐ欲情して、すぐ行為をねだる。主人公とは、そういう女性なのだ。

●正面 0センチ

「〔※4回※ キスする。

受け身な甘いキス。主人公の好きにさせて いるので】

ん……ふ。

ん……ちゅっ

〔※息づかいのみ※ で表現する。

満足げに息を吐く】

ふう……

【そっと優しく。

まるで困っていない様子で。

セリフの内容に反して穏やかに】

ダメではございませんが……



『お嬢様はつくづく困つた方でいらっしゃるな』とは、思います

〈主人公〉

「……あ♥」

シーラ、主人公の左耳にささやく。

これによつて、声の方向が『正面』から『左』に変わる。

★左　ささやき　0センチ　※マークのセリフまでささやく

「ひそひそと、そつと、優しく。

だけど少しセクシーな感じで。

主人公と聞き手に、今後のえつちな展開を期待させるような感じで。

トラック01での行動を再現するような感じで

お仕事が忙しかつたとはい、授業中お眠りになるし。

起きたかと思えば……。

今の今まで。

このようないやらしい事で、頭を一杯にしていらっしゃる。

本当にいけない方ですね……♥

【一呼吸おいてから。

『ほんの少しためてから言う』感じで】
そのようなお嬢様には』※

シーラ、主人公の左耳にささやいた後、そのままキスと耳舐めをする。

●正面 0センチ

「〔※1回※ 耳にキスする。

耳の入り口に、軽く触れるだけのキス〕
ちゅ。

〔※1回※ 耳を舐める。

耳の入り口を、軽く舐めるだけ】
あんむ……。

〔※しばらく※ 耳を舐める。

だんだん、少しずつ音を立てるようにして、ねつちりと舐める。

主人公を気持ちよくさせるのはもちろん、音から興奮を誘おうとしている耳舐め】
ああんむ……。れろおつ……♥

れろ、れろ、れろ。

れろ、れろ、れろつ

ちゅつ ♡ ちゅつ ♡ ちゅぱあつ ♡

はあんむ……ちゅつ。

ちゅぱつ ♡

ちゅるるつ……れろれろ……れろれろ……れろれろ……ちゅぱつ ♡

ちゅつ ♡ ちゅつ ♡ ちゅつ ♡ ちゅぱあつ ♡

ちゅ ♡

【※2回※ ゆっくり呼吸する。】

満足げに、少し興奮した様子で

ふ…… ♡

はあ……「

シーラ、たっぷりとした耳舐めを終えると、再び左耳にささやく。

★左 ささやき 〇センチ ※マークのセリフまでささやく
「ひそひそと、そつと、優しく。
だけど少しセクシーな感じで。

主人公と聞き手に、今後のえっちな展開を期待させるような感じで。

トラック01での行動を再現するような感じで

少々、おしおきをして差し上げなくては、ならぬかも知れませんね。※

【※1回※ 耳にキスする。

耳の入り口に、軽く触れるだけのキス】

ちゅ
♥

（主人公）

「あ、ま、待つて……♥」

しかし、主人公はこんなに淫乱で欲望に弱いくせに、肝心な所で臆病だ。
この期に及んで、続きを拒むふりをする。

●左 0 センチ

【そっと優しく。

主人公も既知の事を、再度自分の口から、優しく言い聞かせるように述べる】

大丈夫ですよ。お嬢様もすでに充分ご存知でしょう？

昼休みのこの講義室には、通りがかる方など殆（ほとん）どおられない。

※

購買に行かれた日菜子様は。

パンをお選びになる時、いつも大変迷われて……。
お戻りになるまで、しばらくかかる』

主人公、シーラの言葉を聞きながら思う。

——ああ、そんな事はわかってる。

わかっているからこそ、わたしはこうしているんだ。

『今なら大丈夫だ』って。『危なくなったら、シーラがすぐに気づくから』って知ってる
くらい。

わたしたちは隠れてこんな事をしてきたんだから……。

と。

〈主人公〉

「さつきと言つてる事違う……♥」

それでも主人公は食い下がつてしまふ。

それはシーラに負けるのが好きだからだ。

目一杯抵抗する振りをして、従順に好きにされるのが大好きだからだ。

●左 0センチ

「そっと優しく。

先ほどまでと全く変わらない口調で、主人公をいじめ始める。

主人公の意図をすべて理解した上で、しらばつくれて不思議そうにするあら。先程と仰る事が違うのは、お嬢様もではありますか。

昼食をお召し上がりになると言ったかと思えば、『やはりやめる』と仰つたり。一体、如何（いかが）なさつたのでしょうか

△主人公

「もおわかつてるじやんつ……♥

さつきからあ♥ わかつてて聞いてるでしょおつ♥」

●左 0センチ

「そっと優しく。

先ほどまでと全く変わらない口調で、主人公をいじめ始める。

主人公の意図をすべて理解した上で、わざと意図を尋ねる
いいえ？ わかりません。

どうなさつたのか、どうか私に教えていただけませんか？

（主人公）

「つ……
♥」

（左 0 センチ）

「少し考えて『ああ、わかった』という感じで。

そつと優しく

ああ……わかりました

だが、ここでシーラは推論を述べ始める。

主人公を念入りに負かすための『仕上げ』に入ったのだ。

（左 0 センチ）

「そつと優しく。

先ほどまでと全く変わらない口調で、主人公をいじめ始める】

お嬢様は、ずっと。

授業中、私（わたくし）に話しかけられた時からずっと。

【※全く変わらない口調のまま※

甘えた感じのセリフを言う。

主人公の心情を予測して、それをあくまで淡々と述べる事で、主人公の羞恥心を煽つて
いる。

『せっくしゅ』は『セックス』という意味。

『キスしながらクリイキ』で一つの単語として言う

『せっくしゅしたい。シーラに学校で、後ろから抱っこでクリいじりされて。大好きな、
キスしながらクリイキしたい』

【※全く変わらない口調のまま※

元の口調に戻る】

と思つていらつしやつたのですね？』

△主人公△

「あ。あつ……♥」

●左 0センチ

「そっと優しく。

『全く煽っていない、優しい口調』で煽る。

答えは『イエス』だとわかつていて、わざとたずねる】

違う？

そのようでしたら、もう昼食に致しましょう。

お嬢様の時間は限られています。

このような事をしている場合ではございませんね】

こんな事を繰り返されて、主人公は、もう興奮のあまり泣き出しそうだ。

認めてしまえば楽になれる。楽になつた先には、とても気持ちいい事が待つていて、そんな誘惑の前で、しり込みしているふりをする。

〈主人公〉

「ちが、わないと」

●左 〇センチ

【優しく続きを促す】

うん？」

でも、もう降参だ。

〈主人公〉

「違わないっ♥

シーラに色々されてつ♥ ……つ、濡れつ、ちやつてる……♥」

主人公は、

……だつて、シーラに犯されるのつて最高なんだもん。

『これよりいい事なんて、この世にいくつあるんだろう』つてくらい、いいんだもん……！

なんて、心の中で誰に聞かせるでもない言い訳を述べながら、自分から行為をねだつていく。

ここは学校なのに。

今日『も』、シーラとのセックスに耽る。

●左 0センチ

「穏やかに優しく。

内心激しく興奮しつつも、それはまだ見せずに同じトーンで煽る】

あら……。

そのような事になつておられたのですね。

それは申し訳ございません。

【※全く変わらない口調のまま※ 言う。

あたかもそれが、当然かつ、なんの問題もない事かのように言う。

『愛液で濡れたショーツを見せろ』という意味で言つている】

では、お嬢様。

今『濡れている』と仰られた箇所を、私（わたくし）に見せて頂けませんか？】

〈主人公〉

「ここでっ……？」

こうして、主人公はのまれていく。

してはいけない事だとわかつていながら、いけない方向へ、今日もまた流れしていく。

●左 0センチ

「穏やかに優しく。

だが、きつぱりと有無を言わせない感じで」
ここで。

【穏やかに優しく。

丁寧に、これから主人公がどうするべきか指示する】

いつものように、私（わたし）の足の間（あいだ）に来て。
今『濡れている』と仰った部分を、見せて欲しいのです。

スカートをたくし上げ、足を開いて。
いつものようだ。

【※少しわざとらしく、媚びた口調で※ 言う。

『嘘喘ぎ』のようなわざとらしさで。

主人公の心情を予測して、今度はさつきとは裏腹に、いかにも媚びた言い方をする事で
主人公の興奮を煽る。

『ちゅき』は『好き』。

『せつくしゅ』は『セックス』という意味】

『学校でおまんこいじられるのちゅき♥ 気持ちいい♥ せつくしゅちゅき♥』

【※さらっと元の口調に戻って※ 話す】

と仰いながら。

恥ずかしいお姿を見せて欲しいのです」

〈主人公〉

「あ……♥」

SE9 主人公が椅子から立ち上がる音
【最初から最後まで流す】

SE10 主人公の足音

【最初から最後まで流す】

SE11 主人公が椅子に座り、シーラの足の間に腰かける音

【最初から最後まで流す】

主人公、とろけた目で息を吐くと、素直に立ち上がつてシーラの膝の間まで向かう。そして、恨めしげにシーラを見上げながら、申し訳程度に逡巡したふりをして……。すんなり足を開き、下着を見せた。

△主人公

「…………♥」

こんなにあつさり従うのは、これがいつもしている事だからだ。

主人公は日常的にこのメイドに犯され、毎回似たような事をさせられているからだ。シーラはこれを実感させるために、いつもこうさせるのだ。

●左 0 センチ

「穏やかに優しく微笑む。

満足げに。

素直に従う主人公が可愛らしいので】

ふふ。素直で可愛らしい』

これによつて二人は『主人公がシーラに膝抱っこされている状態』になる。

シーラは主人公の左耳側に頭を置き、話しかけている。

シーラ、左耳にささやく。

★左 ささやき 0センチ ※マークのセリフまでささやく

「【穏やかに優しく。

少しだけゆっくり目に。

内心激しく興奮しつつも、それはまだ見せずに同じトーンで煽る。

主人公の状況をわざと『じっくり実況』する事で、主人公の羞恥心と興奮を煽る】
全く。お嬢様は些細な事で、すぐ発情なされて。

自分から足を開いて。

このようにはしたなく欲しがって……。

本当に可愛らしい…… ♡ ※

【※3回※ 耳にキスする。

わざとちよつと音立ててキスする。

耳の入り口に、軽く触れるだけのキス】

ちゅ。

ちゅ。ちゅつ ♡ —

△主人公△

「ああっ…… ♡ お願いいつ…… ♡ もう焦らさないでえ…… ♡

したいのつ♥ シーラとしたいつ♥
シーラに気持ちいいのされたいのおつ♥』

★左 ささやき 0センチ ※マークのセリフまでささやく

「[ひとりきわ、特に優しく。

主人公を安心させるように。

内心激しく興奮しつつも、それはまだ見せずに話す】

ええ。承知しました。

ご安心下さい。

すぐ気持ち良くなして差し上げますからね】※

しびれを切らして訴えると、シーラが嫌になる位優しくささやく。

シーラはいかにも清楚、性欲なんてなさそうに振る舞つているが、実態はその逆だ。
あるものがないように見せるのがうまいだけで、本性は主人公よりもよほどぎらついて
いる。

今だつて、主人公は今にも食べられそうだ。

彼女の欲望の贊になつて、めちやくちやにされるのを待つばかりだ。

S E 1 2 シーラが、主人公の下着の中に手を入れる音

【最初から最後まで流す】

S E 1 3 主人公の濡れた股間の音

【最初から最後まで流す】

【繰り返して流す】

【0～1秒ほどまで流した後、次以降の『シーラ』のセリフと重ねて流す】

【▲1 で一度ストップする】

【▲2 で再開する】

【▲3 で S E 1 4 と切り替わる】

シーラ、あたかもそれが当然のように、主人公の下着の中に手を入れる。

そのまま……主人公のクリトリスに触れ、指先でゆっくりと愛撫を始めた。

●左 0 センチ

【※息づかいのみ※ で表現する。】

静かながらに、少し驚いている。

主人公の股間に触れ、濡れ具合を確認したところ、非常に濡れていたので】

ん……。

【※息づかいのみ※】で表現する。

長く、ゆっくりと息を吐く。

うつとりとため息をついている感じで。

主人公がたっぷりと濡れていって、とても嬉しいので】

ふー……♥』

▲1 ここでS E 14が一度ストップする。

●左 0 センチ

「これまでよりも少し興奮して。

まだ穏やかでありながらも、ここから少しずつ興奮してくる】

あら……こんなに濡れておられたのですか……♥』

△主人公

「……うるさいいつ……♥』

主人公の下着の中を、シーラの指がゆっくりと、ゆっくりと上下に行き来する。

手のある部分が盛り上がり、布越しに動きを知らせてくる。
それは、わざとかと思うくらいゆっくり動く。

その度に主人公を、うつとりと痺れるほど気持ちよくして。主人公はその度『自分は今、
こんな場所で足を広げ、こんな事をされているのだ』と思いつかれる。

▲2 ここでSE11が再開する。

●左 0 センチ

「【※2回※ 呼吸する。

少し興奮気味の、少しだけ荒く、少しだけ早い呼吸】
はあ、はあ……♥

【少し興奮気味に。

これまで通り上品でありつつも、少々素が出てしまっている感じで】
凄い。

このような音が出てしまうほど、欲情なさっていたのですね。

可愛らしい……♥

すぐに。すぐにいかせて差し上げますからね。

【※1回※ 耳にキスする。

わざとちよつと音を立ててキスする。

耳の入り口に、軽く触れるだけのキス】

ちゅ
♥】

△主人公△

「……あ。あ、あっ……♥」

シーラ、主人公の左耳側に唇を寄せながら、愛撫を続けていく。

その息が、興奮で少しずつ荒くなっていく。

主人公はそれを感じながら、目を閉じる。

足を小さくぴんと伸ばしたり内側に曲げたり、クリトリスで感じているもの特有の動きをする。

●左 0 センチ

「※4回※ 呼吸する。

少し興奮気味の、少しだけ荒く、少しだけ早い呼吸】

はあ……はあ……はあ……はあ……はあつ……

♥

【※3回※ 呼吸する。

一つ前よりも少し早くなっている呼吸

はあ、はあ、はあ。

【※3回※ 呼吸する。

一つ前よりも、意識してかなりゆっくり呼吸している荒い呼吸

ふー……。ふー……。

ふー……。ふー……。

【※息づかいのみ※ で表現する。

うつとりとしたため息】

はあ……。♥

△主人公

「……あ。♥ あ。♥

……つシーラ、興奮しすぎ……。♥

●左 0 センチ

「少し照れつつも、嬉しそうに。

にこやかに、すんなり素直に認める】

……はい。

お嬢様があまりにも可愛らしくて、昂（たかぶ）つてしまっています」

何とか放つたささやかな抵抗の言葉は、たやすく受け止められて溶ける。主人公はもうおかしくなりそうなのに、シーラにはまだまだ余裕があるようだ。どんな指摘をしても、すんなりこれを認めてくる。

●左 〇センチ

「うつとりと嬉しそうに。

少し興奮して。

まだ、比較的穏やか。

自分が興奮している根拠を述べる

だつて。

まだ、軽くしか触れておりませんのに。

もう、こんなにも身悶えして……

こんなものを見せられては、平静でいられません」

「主人公

「……♥

あ♥ あ……あ……つ♥』

愛撫が、少しずつ本格的になつてくる。

比例して教室に響く水音もかすかに大きくなり、主人公の羞恥心を煽る。主人公は身体ごと反らしたり、シーラの制服の袖を握ったり、不自然なほどゆつくり息を吸つたり吐いたりして、静かに快感に耐えている。

●左 0センチ

「〔※8回※ 呼吸する。

だんだんゆつくりになる。

少し興奮気味の、少しだけ荒く、少しだけ早い呼吸。

主人公の喘ぎ声が、とにかく可愛らしいので】

はあ、はあ。

……はあ。

はー、はーつ。

はー……つ。

ふううつ、ふー……う。

〔※1回※ 呼吸する。

長めのゆっくりした荒い呼吸

はー……♥

【少し興奮して。

まだ、比較的穏やか。

ここからまた状況を『実況』する事で、主人公の興奮と性感を煽っている

お嬢様は、本当にクリいじりがお好きですね……♥

私（わたくし）に抱かれながら、こうして「

シーラ、ここから時折、わざと指の動きと言葉を連動させて話す。

卑猥な音を、自らの口でも再現して見せる。

▲3 ここでSE14がSE15と切り替わる。

SE15 主人公の濡れた股間の音2

【最初から最後まで流す】

【繰り返して流す】

▲4 でセリフとテンポを合わせて流す

▲5 で通常に戻る】

【▲6 でセリフとテンポを合わせて流す】

【▲7 で通常に戻る】

【▲8 で速度が一段階早くなる】

【▲9 でセリフとテンポを合わせて流す】

【▲10 でフェードアウトする】

※ここからトラック終了まで、シーラは、ずっと『やや興奮気味』になる。

『これまでと比較して、すべて一段階ほど興奮しているな』という感じになる。

▲4 セリフとテンポを合わせて流す。

●左 0 センチ

【擬音部分を淡々と。】

やや興奮しつつも、主人公の快感を優先して、抑えようとしている。

声と指の動きが連動しているイメージで

ぬちよ、ぬちよ。ぬちよ。ぬちよ

と愛液をクリトリスに擦（こす）り付けて。

【※少し感情がある程度の、淡々とした口調で※ 言う。
だんだん高くなる。】

『棒読みっぽい喘ぎ』のようなわざとらしさで

『あつ。あつ。あつ。あつ♥』

【※元の口調に戻つて※ 話す】

と喘いで。

快樂を求めて腰まで揺らされて……♥

ここは学校なのに。お構いなしで、夢中になつてしまわれるのですものね。
そんなにも、気持ち良くなりたいのですね……♥

「ぼそっと。

だが、本音が漏れている感じで】

可愛い】

〈主人公〉

「……！」

主人公が快感に小さく跳ねたのを見計らうかのよう、シーラの攻めが強まる。
ねつとりと、容赦なく、主人公の快感を高めてくる。

「穏やかに優しく。

主人公が安心してイけるようにしたいので
良いのですよ。ほら」

▲6 セリフとテンポを合わせて流す。

●左 0 センチ

〔擬音部分を淡々と同じテンポで。〕

声と指の動きが連動しているイメージで

ぬちよ、ぬちよ。ぬちよ、ぬちよ



くちゅくちゅ、くちゅくちゅ。くちゅくちゅ、くちゅくちゅ
クリトリスさんをさすつて、気持ち良くなりましょうね……



〔※6回※ 呼吸する。〕

だんだん早くなる。

少し興奮気味の、少しだけ荒く、少しだけ早い呼吸

はあ、はあ、はあ。

はあ、はあ。

はあ……つ



〔※1回※ 呼吸する。〕

長めのゆっくりした荒い呼吸。

ここで呼吸を整えて、興奮しすぎないようにしている。

自分の興奮よりも、主人公を気持ちよくする事の方が大切なので】

ふーっ……♥

【※1回※ 呼吸する。

ここで呼吸を整える】

……はあ』

△主人公△

「……あ。あ♥ あ♥ あ♥」

シーラの指に全身を支配され、ただ喘ぐほかない主人公を、シーラが興奮した目で見つめている。

それを実感して、主人公はさらに感じてしまう。

ここが一体どこなのか、痛いほど理解した上で、ますます快楽の虜となる。

▲8 ここでSE15の速度が一段階早くなる。

●左 0センチ

「穏やかに優しく。

少し興奮を抑えたので。

今度は『人に見つかるかも知れない事』をほのめかして、主人公を興奮させようとしている】

少々動きを早めましょか。

このようなお姿を人に見られたでもしたら、大変ですものね。

誰かに見つかる前に、ご満足頂かなくては……♥】

そんな主人公に、シーラがささやく。

たっぷり優しくして、丁重に扱いながら、的確に主人公をめちゃくちゃにしていく。

シーラ、主人公の左耳にささやく。

★左 ささやき 0センチ ※マークのセリフまでささやく

「穏やかに優しく。

内心激しく興奮しつつも、それを抑えて同じトーンで煽る。

主人公の性癖をあえて言葉にする事で、主人公の羞恥心と興奮を煽る】

お嬢様はこうして、毎日。

毎日メイドにいかされないと生きていけない。

見つかりそうな場所でるのが大好きな。

露出癖（へき）のある方である事が、バレてしまいしますもの……♥」※

シーラ、言いながら指の動きを早めていく。

主人公の絶頂が近づいている事、そろそろ友人たちが戻ってくる事を考慮し、主人公の『特に弱いところ』を攻め始める。

主人公はもう、ただされるがまもなくせに不相応なほど感じて、指が一回往復する度に甘いため息を漏らすばかりだ。

●左 0センチ

「※8回※ 呼吸する。

だんだん早くなる。

興奮気味の、少しだけ荒く、少しだけ早い呼吸

はー。はー。はー。はあ。

はー、はあ。はー、はー……



—

△主人公

「つ……く♥ あ♥ あ♥ あつ♥
い い つ……♥ シーラ、きもちいいよお……♥
これ好きいつ……♥」

●左 0センチ

「穏やかに優しく。

内心激しく興奮しつつも、それを抑えて話す。

主人公の特に感じる部分（『ここ』）を愛撫しながら】

ああ……ここですね。

お嬢様の大好きな、ここ。

ここを、側面から優しくさすって……中心に向かって、斜めに動かして。

この速さで」

▲9 セリフとテンポを合わせて流す。

●左 0センチ

「擬音部分を淡々と、同じテンポで。

声と指の動きが連動しているイメージで

すりすり。すりすり。すりすり。

すりすり

とするのが、お好きですものね。

【※3回※ 呼吸する。

少し興奮気味の、少しだけ荒く、少しだけ早い呼吸】
はあ……はあ……はあ……

△主人公△

「シーラっ……キスして……

ちゅー……♥ ちゅーして♥」

主人公が涙ながらに訴えると、シーラが微笑んだ。

すでに絶頂が近づいている事、その時ばかりは声を抑えられそうもない事を、シーラは理解している。

シーラはそのまま主人公の顔を引き寄せると、唇にキスをする。
たっぷりと口づけ、その中まで丁寧に犯していく。

これによつて声の方向が『左』から『正面』に変わる。

●正面 0センチ

「〔※1回※ キスする。」

シーラからキスする、キスが始まる動作。

主人公の顔をこちらに向けさせてキスしている
ん……。

〔※しばらく※ キスする。」

たつぶり積極的に、ねつとりとデイープキスする。

喘ぎ声が漏れそうな主人公の唇を塞ぐ事で、嗜虐心が満たされるキス】

ちゅ。んつ……ちゅつ

ちゅつ。ちゅつ

ちゅぱあつ

れろれろ。れろれろ。れろれろ。

ちゅるるつ……

はあんむ……ふちゅつ

ちゅるつ、ちゅ♥ ちゅ♥

〔※1回※ 呼吸する。」

【ここで唇を離す】

んつふ……。

【※3回※ 呼吸する。

少し興奮気味の、少しだけ荒く、少しだけ早い呼吸)
はあ……はあ……はあ……。

【うつとりと声を漏らす。

穏やかでありつつも、素の本音が漏れている感じで】
ああ……。

お嬢様、可愛い……。♥

大好きです。私（わたくし）の可愛いお嬢様……。♥

【※1回※ キスする。

シーラからキスする、再びキスが始まる動作】
ん……。

【※5回※ キスする。

たっぷり積極的に、ねつとりとディープキスする。

主人公が好きでたまらないという感じのキス】

ああんむ……ちゅつ♥ ちゅつ♥ ちゅつ♥ くちゅうつ♥

【※3回※ 呼吸する。

少し興奮気味の、少しだけ荒く、少しだけ早い呼吸
はあ……はあ……はあ……
〔主人公〕

「シーラっ……♥ シーラあ……♥」

●正面 0センチ

「穏やかに優しく。

内心激しく興奮しつつも、それを抑えて話す。

余裕のあるふりをしている」

あら……もうイきそうですか？

学校でする時は、いつも本当にすぐイッてしまわれますね。

いつも外でのセックスでは、沢山感じて仕舞われますものね……♥」

主人公、涙に濡れたとろけた目でシーラを見上げ、絶頂がすぐそばに迫っている事を知らせる。

シーラはそれを見て、ダメ押しのようにささやく。

これによつて声の方向が『正面』から『左』に変わる。

★左 ささやき 0センチ ※マークのセリフまでささやく

「穩やかに優しく。

少しだけ早口になる】

ええ、どうぞ。どうぞ絶頂して下さいませ。

このようにな……」※

これによつて声の方向が『左』から『正面』に変わる。

●正面 0センチ

「※1回※ キスする。

主人公の唇を塞ぐ】

ん。

【少し苦しそうに。

キスの合間に、何とか話す感じで】

唇を塞いでおいて。

【※1回※ キスする。

再び主人公の唇を塞ぐ

ん。

【少し苦しそうに。

キスの合間に、何とか話す感じで】

差し上げますから……♥】

△主人公

「んんうつ……♥ んーつ……♥ んー……♥」

●正面 0センチ

「〔※6回※ キスする。

たっぷり積極的に、ねつとりとディープキスする。

主人公が好きでたまらないという感じのキス】

んれろおつ……♥ んつく……ん

んうつ……♥ ん。 んつ

〔※3回※ ※鼻で※ キスしたまま呼吸する。

興奮気味の、荒く、早い呼吸】

ふーつ、ふーつ。

ふううつ……



【※しばらく※ キスする。

だんだん苦しそうなキスになる。

たっぷり積極的に、ねつとりとデイープキスする。

主人公が好きでたまらないという感じのキス】

ん ♥

ん ♥

ん ♥

ん ♥

ん

【※6回※ ※鼻で※ キスしたまま呼吸する。
興奮気味の、荒く、早い呼吸】

ふーはあ、ふーはあ。

ふーはあつ……

【※しばらく※ キスする。

ひとつ前よりも、さらにもう一段階苦しそうなキスになる。

だんだんさらに苦しそうになっていく。

主人公の絶頂が近づいてきてる】

ん。んつ…… ♥

ん

ん

ん

ん

ん

う……

つ

♥

んつ。ん…… ♥

ん

ん

う……

つ

♥

んーつ ♥ んーつ ♥ んーつ ··· ··· ♥

【※1回※ キスする。】

ここで、主人公が絶頂する。

※絶頂ポイントである事を、比較的わかりやすく伝えて下さい※
んんううつ··· ♥』

▲10 ここでSE15がフェードアウトする。

●正面 0センチ

「【※12回※ ※鼻で※ キスしたまま呼吸する。

興奮気味の、荒く、早い呼吸】

ふーはあ、ふーはあ。ふーはあ。

ふーはあ、ふーはあ。ふーはあつ ♥

【※6回※ ※鼻で※ キスしたまま呼吸する。

だんだんゆっくりになる。

苦しそうな呼吸】

ふーはあ、ふーはあ、ふーはあつ···。

【※1回※ 呼吸する。

【ここで唇を離す】

はあ。

【※9回※ 呼吸する。】

だんだんゆっくりになる。

とても荒く、早い呼吸が、だんだんゆっくりになつて、落ち着いていく

はあ、はあ。

はあ。はあ。はあつ。

はーつ……♥ はーつ……♥ はーつ……♥ はーつ……♥

△主人公△

「はーつ……♥ はーつ……♥ はーつ……♥ はーつ……♥」

こうして、主人公は絶頂した。

学校の昼休み。大多数の生徒が食事をしたり、休憩を取つたり、ごく健全な遊びをしたりしている中、隠れて、自ら望んで、恋人に犯されて絶頂した。

S E 1 6 シーラが身体を動かす音
【最初から最後まで流す】

●正面 0センチ

「〔※1回※ キスする。」

わざとわかりやすく音を立ててキスする】

ちゅ ♡

〔※息づかいのみ※ で表現する。

満足げに息をつく】

⋮⋮ふう。

〔優しく主人公を褒める。

満足げに。

『とても可愛らしく、魅力的に絶頂しましたね』という意味で言っているふふ。よくできました。

〔※4回※ キスする。

優しい、軽いキス。

イツて疲れている主人公を、いたわるようなキス】

んつ⋮⋮。ちゅつ。ちゅつ。ちゅ ♡

〔優しく主人公を褒める。

満足げに。

『とても可愛らしく、魅力的に絶頂しましたね』という意味で言っている
とてもお上手でしたよ……お嬢様。

【※1回※ キスする。
優しい、軽いキス】
ちゅ♥』

〈主人公〉

「……

着……なきや。そろそろ日菜子たち戻つてくる……」

S E 17 主人公が身体を動かす音

【最初から最後まで流す】

主人公、シーラにたっぷり甘やかされて内心とろけ切っているくせに、無理に体を起こし、シーラから離れて下着を穿こうとする。

だが、うまく行かない。あまりにも気持ちよすぎて、達して身体が弛緩するとともに、けだるい疲労感が襲ってきたのだ。

おそらくこのまま何もしなくても、シーラが穿かてくれるだろう。

だが、やはり自分の事は自分でしたい。

だから、今すぐ自力で、と思うのだが……身体が上手く動かせないのだ。

●正面 30センチ

「穩やかに優しく。

すでに、まるでセックスなんてしなかつたかのように通常通りの態度で】
ええ……お召し物を直しましょう。

「しつれつと。

まるでそれが当然かのようになに言う】

ああ……でも、こちらはお預かり致しますね】

〈主人公〉

「あっ……！」

S E 1 8 シーラが主人公の下着を完全に脱がす音

【最初から最後まで流す】

すると、シーラが予想だにしない事を言い出した。

シーラはさらりと主人公の左足を持ち上げると、足首にかかつっていたショーツをそのままおろす。

そのままその手中に収めると、当然のように奪い取つて荷物の中に入れてしまつたのだ。同時に、イツたばかりの主人公の性器に小さく風が通る。

それはひんやりしていて、それなのに主人公は、また熱くなつてしまつた。

シーラ、主人公の左耳にささやく。

これによつて声の方向が『正面』から『左』に変わる。

★左　ささやき　0センチ　※マークのセリフまでささやく

「穩やかに優しく」

あたかも、それが当然であるかのように言う

このような汚れた下着を身につけていては、気持ち悪いでしょう？

ですから。お嬢様はこのまま。

下を穿かずに。放課後までお過ごし下さい。

……ね？」※

〈主人公〉

「何、言つてっ……♥」

だが、主人公の抗議の言葉はまたも意味をなさない。

シーラが予想した通りのタイミングで……あまねと日菜子が戻ってきたからだ。

▲ ボイス加工あり

【とても遠くで、かすかに聞こえる】

【『ほんのかすかに聞こえる』『何を言つているのか、完璧には把握しづらい』程度の音量
でお願いします】

〈あまね〉

【日菜子に話しかけている。】

楽しそうに。

なんでもない雑談。

好きな購買のパンと、お昼ご飯で食べ大量について話している】

んく……。あまねとしてはあ。

ツナのサンドウイッチが一番好きなんだけどお。

サンドウイッチだけだと足りない時があつてえ……。

そういう時あんぱんがあると。助かるっていうか……】

▲ ボイス加工あり

【「とても遠くで、かすかに聞こえる」
『『ほんのかすかに聞こえる』『何を言っているのか、完璧には把握しづらい』程度の音量
でお願いします】

△日菜子

「【あまねに話しかけている。

楽しそうに。

なんでもない雑談。

好きな購買のパンと、お昼ご飯で食べ大量について話している】

あまねはほんと甘いパン好きだよね】

△主人公

「……あ……つ
♥」

●正面 0センチ

「【穏やかに優しく。

まるで何事もなかつたかのように、自分たちは普通に過ごしていたかのような口調で言
う。△

次のセリフとの対比を作る】

さあ。もうお二人が来ますよ』

恥ずかしさと心許なさで全身を熱くする主人公に、シーラが優しく告げる。

それはあまりにも優しくて、また、慣れていて……。

主人公は、いつもこのメイドに負けっぱなしである事を、実感してしまったのだつた。

★左　ささやき　〇センチ　※マークのセリフまでささやく

「ひそひそと、そつと、優しく。

だが少しセクシーに、意地悪な事を言う】

ちやんと上手に……誤魔化して下さいね」　※

ここでフェードアウトして終了。